

## 近世鹿児島における磁器窯場間の技術交流

渡 辺 芳 郎

### はじめに

近世鹿児島における磁器生産は、17世紀において加治木町山元窯（関編1995）や始良町元立院窯（下鶴編1995）などで試みられており、また豎野系窯場でも焼かれていたと推定されているが（田沢・小山1941 pp.109-112）、いずれも短命に終わるか、あるいは陶器生産を主体とする中で、部分的に磁器が焼かれていたという程度にとどまる。

しかし18世紀後半になると、天草陶石が供給されるようになり、磁器の本格的生産が始まる。その代表的な窯場として川内市平佐焼（川内市歴史資料館編2000など）が挙げられるが、そのほかにも加治木町弥勒窯（関編2001）・日本山窯（田沢・小山1941 pp.218-220, 2001年加治木町教育委員会発掘調査）、東市来町美山（苗代川）南京皿山窯（田沢・小山1941 pp.215-218, 出口2002）、阿久根市脇本窯（池水1978）・大曲（阿久根皿山）窯（関2001）、始良町重富皿山窯（深野2002）など、18世紀後半から19世紀にかけて、複数の磁器窯が操業していたことが確認されている。また苗代川ではウチコク窯・御定式窯などでも、陶器とともに磁器が焼かれていたと推測されている（田沢・小山1941 pp.183-189）。これら磁器窯の興隆は、当時の藩による財政再建を企図した産業育成策の一端を示すものであろう。

さて磁器窯開窯の際には、肥前地方などから技術導入がはかれるとともに、藩内の磁器窯場間でも陶工の移動をともなう技術交流が行われていた。筆者はかつて、その技術交流について若干触れたことがあるが（渡辺・関・下鶴2000 p.372, 渡辺2000 b p.47）、本稿では、窯神石塔の銘文などを手がかりとしながら、より具体的に検討してみたい。その際、文中でも触れるようにいくつかの先学の成果を踏まえていることを明記しておきたい。

## 1 他藩からの技術導入

### (1) 肥前・肥後と平佐焼

川内市天辰に所在する平佐焼窯は、これまで天明6年(1786)開窯とされていたが(田沢・小山1941など)、近年の調査研究で、安永年間(1772-81)頃までさかのぼる可能性が改めて指摘されている(小島1999・2000)。開窯年代についてはここでは詳しく触れないが、その開窯に際して、肥前や天草から技術導入をはかったことが、「皿山磁器製造所沿革」と「磁器製造所由緒」(ともに『薩陶製蒐録』所収)に記されている。

「皿山磁器製造所沿革」(明治18年(1885))

「(前略)安永年中平佐郷領主北郷某家臣伊地知某ニ命シテ、肥前國有田ヨリ陶工師ヲ聘シテ磁器製造ノ業ヲ創メ(後略)」(下線渡辺)

「薩摩郡平佐郷天辰村ニアリ磁器製造所由緒」(明治19年(1886))

「(前略)明和ノ初年ニ至リ、肥前ノ國有田并ニ肥後國天草辺ヨリ陶器師若干名ヲ聘シ磁器ノ製造所ヲ設立シ(後略)」(下線渡辺)

また「明治三十三年三月 星山貞恒」の署名のある「薩摩焼傳來ノ畧記」(『薩藩旧記』所収)中の「五代(星山仲次-渡辺)金致」(宝暦2年(1752)家督相統一同書より)の項に、年代は不詳ながら、「脇元」にあった窯を川内平佐に移した際、天草地方の男女15~16人を招いたと記されている<sup>(1)</sup>。

以上の記述はいずれも同時代史料とは言い難いが、平佐焼開窯にあたって、肥前有田や肥後天草から技術導入をはかったと伝えている。有田の陶工が来鹿していたことを示す他の資料は現段階では確認していないが、天草との関係については、天草で陶石を商った庄屋・上田家が、18世紀後半、平佐焼窯場に技術援助を申し出た文書が伝わっている(川内市歴史資料館編2000 p.10)。また文化14年(1817)の『上田宜珍日記』には、その38年前(安永8年(1779)頃)天草の絵師・清水与右衛門(旧名：四郎七)が平佐に移り、永住したと記している(平田編1993 p.169, 川内市立歴史資料館編2000 p.6, 小島2000 p.38)。

さらに平佐焼窯跡近傍に所在する皿山墓地には、寛政5年(1793)銘の「肥前國長与村之／富永利頭太／妻」の墓石が残っており(図1)、その隣には寛政



図1 川内市皿山墓地所在の寛政五年「富永利頭太妻」墓石  
(2000年12月21日 渡辺撮影)

3年銘の「富永善蔵」の墓石が並んでいる。福元忠良氏は、「富永利頭太」「富永善蔵」は、平佐焼創業に関わった長与焼の陶工ではないかと推測している(福元2001 p.154)。なお、平佐をめぐる肥前・天草・苗代川との関係については、福元氏が文献を中心に詳しい検討を行っており(福元2001)、本稿は氏の検討結果に依るところが大きい。

以上のように、平佐焼開窯にあたっては、肥前や肥後の陶工・画工が移り住

み、技術導入がはかられていたことが十分に想定できよう。また寛政8年(1796)の上田家文書『近国焼物山大概書上帳』(以下『書上帳』と略称)の記載から、天草陶石が平佐焼の原料として供給されていたことがわかる(同人マジミ編1991, 川内市歴史資料館編2000 p.9)。

ところで、現在、川内市歴史資料館には、向井与藤次が肥前有田で描いたとされる、天保9年(1838)銘箱書の「焼物絵形」が伝わっている(川内市歴史資料館編2000 p.13)。また先述の「由緒」には、書類に参考資料として付けられたと思われる「錦手焼」の「皿」の解説として、

「一 皿壺個 但錦手焼

右ハ文久元年江戸詰下向ノ際平佐郷前記伊地知弥右エ門陶器調製改良ノ為メ尾州名古屋へ差越同所春日井村與八郎及ヒ西京清水五條坂ニ居住ノ尾弘屋常蔵ヨリ碗青調合ノ密傳ヲ受ケ帰郷后専ラ陶器製造ノ事ニ従事シ當所ノ皿山へ更ニ一ノ京窯ヲ新築シ長崎亀山ノ製造人井村小三郎畫工青木宗十ヲ聘シ来リ錦手焼ヲ製シメタル所諸方ノ注文ヲ受ケタル。而耳ニ英國人モンブラン態々當地皿山製造所へ来リ陶器物注文セシコトアリ其際見本用ヲ製シタルモノヲ右伊地知家ニ保存シアリタルモノナリ」(下線渡辺, 文久元年=1861年)

とある。つまり尾張や京焼, 長崎亀山の陶工・画工の技術が, 間接・直接に導入され, また幕末にはおそらく輸出を想定しながら, ヨーロッパ人の指導も受けたと伝えられているのである<sup>(2)</sup>。もちろんこれらの「伝承」がどの程度の信頼を置けるものかは, 今後の検証が必要であるが, 平佐窯が開窯時だけでなく, 19世紀に入っても積極的に他藩の技術を導入していた可能性はあったといえよう。

## (2) 肥前と弥勒窯

加治木町木田弥勒に所在する弥勒窯は, 天明6年(1786)に開窯された磁器窯である。その開窯の際に建立された「山神」を祀った石塔が現在も残っており, 「天明六 丙午 十二月 皿山御免許」という銘文から開窯の年代が知られる(図2)。同石塔には, 「皿山主取川原十左衛門ノ嫡子川原弥五郎」という龍門司窯の陶工名とともに, 「右同主取肥前國平戸細工人ノ弥木休右衛門」「同國繪



山神  
御祭定日  
二月十五日  
十一月十五日

【正面】

皿山爲榮久  
嫡子川原弥五郎  
奇進 檢眼  
輓  
右同主取肥国平戸細工人  
弥木休右衛門同国繪師  
大山仁右衛門親大山武左衛門

【右側面】

天明六  
十二月  
皿山御免許  
丙  
午

【背面】

皿山御取立掛御役人  
白尾間宮  
御側方掛  
安山檢眼  
掛物奉行  
川崎輓  
掛檢者拂  
中山七兵衛

【左側面】

註：碑文の川原弥五郎の「郎」は「助」と似ているが、「郎」の異体文字として判断した。

図2 加治木町弥勒窯跡所在の山神石塔銘文（関編2001より）

師／大山仁右衛門親大山武左衛門」と刻まれ、弥勒窯開窯にあたって「肥前國平戸」から陶工と絵師が来て、「主取」（責任者）となっていたことが知られる。これらの人物については、弥勒窯跡の発掘調査報告書に検討があり（関編2001 pp.55-56）、それによれば「平戸」とは現在の長崎県平戸市を指すものでは

なく、佐世保市西部、木原山・江永山・三川内山に所在する窯業地「平戸焼」を指すと考えられている。

以上から、弥勒窯では、肥前陶工が来鹿するとともに、地元の陶工たちが参画して、開窯・操業されたと推測できる。一方、明治18年の「繭糸織物陶漆器共進会 陶器功労者履歴」によれば、川原芳工（十左衛門種甫）は、安永8年(1779)「肥前皿山に至り石焼の法を伝授せんことを欲して」、肥前に陶法修行に出て、帰国後、「石焼の法を開く」と伝えられている。同時代史料ではないので確定しがたいが、弥勒窯開窯に先行して、芳工はすでにある程度、石焼＝磁器焼成の技法を心得ていたのかもしれない。

ところで先述の『書上帳』に、次のような記述が見える。

「一 忠佐皿山 窯一登此数凡五間 但地土ヲ以テゴス茶碗類之下品焼物出来是者人高凡十人程」

報告書では、この記述が弥勒窯を指す可能性を指摘しており、筆者も同意する。なお「忠佐皿山」では、原料として「地土」を用いている。この「地土」が具体的にどの場所からの陶石を指すものかは判然としないが、少なくとも天草陶石を用いずに磁器生産を行っていたと推定される。

## 2 藩内での技術交流

### (1) 平佐焼と苗代川南京皿山窯

平佐焼窯跡群には多数の石塔が残存しており、そのうち文化元年(1804)銘と同7年(1810)銘の石塔には、それぞれ約30名の陶工名が刻まれている（川内市歴史資料館2000，同館編2000参照）。その陶工中、前者には「白慶石」、後者には「白慶碩」の名が見られる（図3）。両者は同一人物と想像される。ほぼ同時代の『寛藩名勝考』（寛政7年(1795)）に苗代川に百姓がいたことを伝えていることから（鹿児島県維新史料編さん所1982 p.28），白慶碩（石）は苗代川出身の陶工であったと考えられる（渡辺2000b p.46）。

また皿山墓地には複数の百姓の墓石が残っており、今のところ確認されているもっとも古いもので享和2年(1802)，もっとも新しいもので天保7年(1836)

文化元年甲子五月吉日



[右側面]

奉寄進



[表面]



[台石-3]

内山下善  
山林市藏



[台石-2]

中白鬼野清  
山慶塚崎水  
辰太石平與  
右五郎左八右  
衛工郎藏八八工郎工  
門門門門



[台石-1]

川弟向宮勝川竹龜黒大落東  
東子井田目野之沢木館合條  
運丸兵休平平下武義利覺仁  
右半太右右太善八許助之八  
工六工工郎吉進  
門門門門



[表面]

文化七年庚午  
奉寄進  
五月吉日



[台石-3]

善市善三造甚長太金三  
五右右五右五兵右右八  
郎藏藏藏工門門門門



[台石-2]

青野永清向川白勝  
崎崎崎井井野野慶目  
市平半與兵兵平平平  
藏次八六工工太太太  
門門門門門門門門



[台石-1]

鬼伊中宮竹川龜黒東  
塚地山田館東沢木條  
平知太郎下休利運武平仁  
左十太郎善右助右八藏八  
工門太吉工門門門門門  
門門門門門門門門

図3 川内市平佐焼窯跡群所在の文化元年・七年銘石塔銘文  
(川内市歴史資料館2000より一部改変)



である。小島早智子氏は、享和2年という銘から、苗代川陶工が平佐焼創業時から関与していた可能性もあると推測している（小島2000 p.39）。

百姓の苗代川陶工は、弘化3年（1846）、苗代川の「肥前伝焼物」、つまり磁器を焼く南京皿山窯の開窯をめぐっても登場する。弘化2年の『所役日記』4月26日付文書には、「平佐居住苗代川人白正圓一類」として、平佐に居住する「白欣圓」と「白欣碩」（欣圓の叔父）の名が出てくる（谷川他編1979 p.688）。また吉田光邦・横井清が紹介している『御内用方萬留一番』中、嘉永元年（1848）7月21日付文書に、「苗代川肥前伝焼物方主取」として「白欣圓」「白欣碩」の名前が出てくるとともに、「右兩人共、先祖の代より平佐え居付き」とある（吉田・横井1965b p.125）。「白慶碩（石）」と「白欣圓」「白欣碩」との関係は現段階では判然としないが、少なくとも百姓陶工を介して、平佐焼と南京皿山窯が相互に技術交流を持っていたことは確実である（渡辺2000b pp.46-47）。

このほか弘化3年（1846）、苗代川振興に尽力した村田甫阿弥の依頼により、「平佐家来北郷次兵衛 拘者 仲蔵」という「竈打ち調え方に取馴れ居り候者」も苗代川へ派遣されており（吉田・横井1965a pp.106-107）、南京皿山窯の窯体築造にあたって、平佐焼窯場の工人が関与していたことがうかがい知れる<sup>③</sup>。

また『御内用方萬留一番』の記載から、南京皿山窯が原料として天草陶石を用いていたことがわかっている（吉田・横井1965a p.107、深港2002 p.40）。

## (2) 平佐焼・南京皿山窯・日木山窯

万延元年（1860）5月、加治木町日木山に新たな磁器窯—日木山窯が開かれるが、その開窯・操業にあたっては、苗代川と平佐焼の陶工が関わっていた。まず苗代川の白欣圓を招致して開窯したが、文久元年（1861）10月までに11回焼成するものの、十分な収益が上げられなかった。そこで同年12月に、平佐焼の主取・落合文右衛門と陶工・絵師各2名を招いた。平佐と苗代川の陶工たちは、それぞれ別々の工房で作業したという。また文久2年5月の新窯築造の際にも平佐焼の陶工が招聘されている。以上は、加治木島津家の家老・新納仲之進の日記のうち、文久2年1月16日、5月17・18日付の記述から知られ、『薩摩焼



の研究』にその内容が記されている（田沢・小山1941 p.218）<sup>(4)</sup>。

また関一之氏は、現在の龍門司窯場に伝わるロクロの軸受けを報告しているが（関1999）、その中に、日木山窯のロクロで用いられたと伝えられているものがある（図4）。軸受けは磁製で、万延2年（1861＝文久元年）の紀年銘とともに「車仲寛（寛?）」銘がある。車姓は、朝鮮から鹿児島に連れて来られた苗代川陶工の姓氏を伝える『先年朝鮮より被召渡留帳』において当初より見られる姓のひとつである（深港2000など参照）。

磁製であること、日木山窯開窯翌年の紀年銘であることを考慮すれば、軸受けが伝承のように日木山窯に関わることを示すとともに、日木山窯に苗代川陶

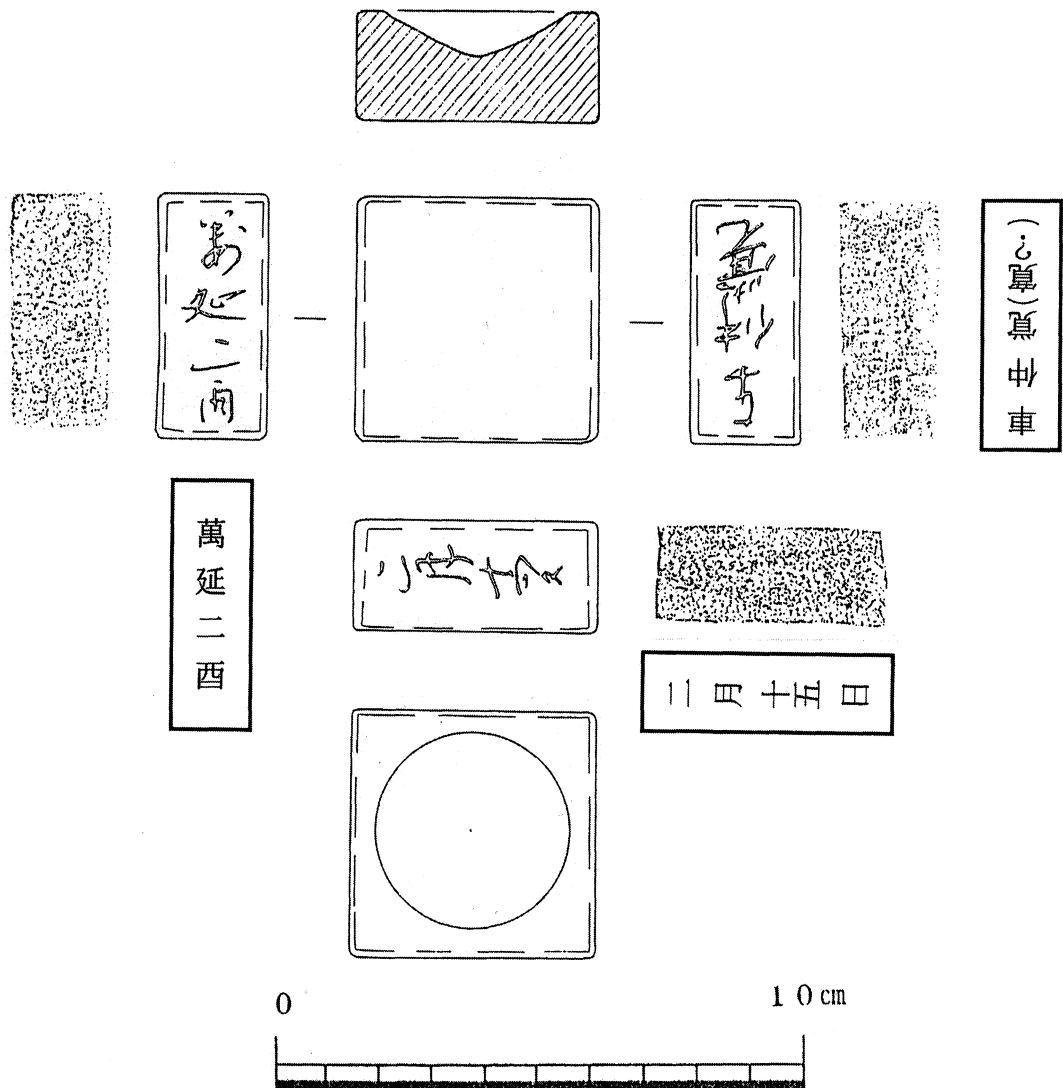


図4 加治木町龍門司窯場伝来のロクロの軸受け（関1999より一部改変）

工が関与していたことを示唆する物的資料といえよう。

なお日木山窯の磁器の原料についてははっきりしないが、『薩摩焼の研究』では、やはり天草陶石を用いていたと推測している (p.220)。平佐焼や南京皿山窯からの技術導入を考えれば、原料もまた両窯と同様に天草陶石を使っていた可能性は十分に考えられよう。

### 3 天草陶石の流通

18世紀後半から19世紀にかけての磁器窯の興隆は、鹿児島だけの現象ではない。九州内を見れば、福岡県須恵焼 (1758年)、熊本県網田焼 (1792年)、宮崎県小峰焼 (1790年頃) など各地で磁器窯が開窯し、さらに京焼 (18世紀後半) や愛媛県砥部焼 (1777年から磁器生産開始) など、西日本各地に磁器窯が広がっていく (仲野1998参照)。

この九州および西日本における磁器窯興隆の背景には、天草陶石の流通があったと考えられる。その点について、先にも触れた『書上帳』を検討してみたい<sup>(5)</sup>。

『書上帳』は、上田家が作成した陶石販売のための「市場調査報告」とも評せるもので、18世紀末における九州および西日本の窯場、計62ヶ所の原料・窯数・工人数・製品の性格などが記されている。その情報には精粗があり、また誤った情報もないわけではなく (渡辺2000a 参照)、さらに当然、上田家の利害と密接に結びついているのでサンプリング・バイアスや上田家の「主観」が入り込んでいる可能性は否めない。ただし天草陶石の販売先について、上田家が虚偽を記す必然性はなく、『書上帳』に取り上げている窯場が、寛政8年段階で操業している九州の窯場すべてかどうか、という問題を残るものの、その販売先の記述は信頼がおけるものと推測される<sup>(6)</sup>。

『書上帳』に挙げられている62ヶ所の窯場のうち、「南京焼」(磁器)を生産した窯場は38ヶ所で、全体の61.3%である。この「南京焼」のうち「天草土」を用いる窯場は8ヶ所、「地土+天草土」は7ヶ所、つまり天草陶石を用いて磁器を生産する窯場は15ヶ所、磁器窯場の39.5%を占める。しかし磁器窯場38

ヶ所のうち、17ヶ所は「肥前佐賀領在（有）田」に属しており、それらはいずれも「地土」を用いている。有田を除く21ヶ所の天草陶石の使用頻度は71.4%、大村領や平戸領など肥前地方以外の磁器窯8ヶ所のうち6ヶ所でも天草陶石を使用している（表1）。

表1 『近国焼物山大概書上帳』における「南京焼」窯場の原料と製品

|     | 肥前佐賀領(17)           | 佐賀領以外の肥前(13) |     |        | 肥前以外(8) |     |        | 合計 |
|-----|---------------------|--------------|-----|--------|---------|-----|--------|----|
|     | 地土                  | 地土           | 天草土 | 天草土+地土 | 地土      | 天草土 | 天草土+地土 |    |
| 極上品 | (10 <sup>*1</sup> ) |              |     | 1      |         |     |        | 1  |
| 上品  | 17                  |              |     |        |         |     |        | 17 |
| 中品  |                     | 1            | 3   |        |         | 2   | 3      | 9  |
| 下品  |                     | 3            | 2   | 2      |         |     |        | 7  |
| 不明  |                     |              |     | 1      | 2       | 1   |        | 4  |
| 合計  | 17                  | 4            | 5   | 4      | 2       | 3   | 3      | 38 |

※1 「在(有)田内皿山」10ヶ所では「赤絵錦手極上物」を焼くという。

この6ヶ所とは、筑前の「須恵皿山」（須恵焼）、筑後の「黒崎皿山」（黒崎焼）、薩摩の「川内皿山」（平佐焼）、肥後の「大田皿山」（網田焼）、伊予の「伊予国皿山」（砥部焼か）、安芸の「広島皿山」である。「広島皿山」と黒崎焼については不明な点も多いが<sup>(7)</sup>、他の窯はいずれも18世紀後半に開窯した新興磁器窯である。つまり肥前佐賀領以外における磁器生産において、天草陶石が果たした役割がきわめて大きかったといえよう。

この天草陶石の広範な流通は、京焼に関する文献からも推測される。「天草石」に関する記述は、文政13年(1830)の欽古堂亀祐による『陶器指南』に出てくる。ただし明治5年(1872)の『京都陶磁考』では「天草石」という語の内容として、天草陶石だけでなく九州各地の陶石が挙げられ、「右各地俗に皆天草石を以て総名とす」とある。それゆえ『陶器指南』における「天草石」もストレートに「天草陶石」とすることはできない。しかし19世紀における「天草石」という名称の使用は、陶磁器を「瀬戸物」と呼ぶのと同様に、天草陶石の西日本における広範な流通を示唆しているといえよう<sup>(8)</sup>。

前章で触れたように、弥勒窯は「地土」を用いていたが、平佐焼と南京皿山窯では天草陶石を原料として用い、日木山窯もその可能性がある。つまり鹿児島における磁器生産も、上記の天草陶石の広範な流通を背景として成立していたと考えられる。

#### 4 近世鹿児島における磁器窯間の技術交流

以上検討してきた技術交流について、同時代史料の記述を中心に模式的にまとめたものが図5である。また時代的には鹿児島における磁器窯場の技術交流は二段階を経ていると言えよう。第一段階は、18世紀後半、磁器窯開窯にあたって、肥前や肥後など、磁器生産に技術伝統のある地域から陶工・画工を招致することである。その際には、弥勒窯石塔に記されているように、地元の陶工が参画し、両者の共同で磁器窯が開窯・操業されていたことがうかがわれる。

第二段階は、19世紀、藩内での技術交流が盛んになる時期である。この時期、平佐窯などでは、引き続いて藩外からの技術導入も積極的に継続していたらしいが、それとともに、当時、その平佐窯の陶工たちが南京皿山窯・日木山窯などの開窯・操業に関わっている。つまり19世紀中頃の鹿児島において、平佐窯が技術的に中心的存在であったと推測できる。

なお新納稔明氏は、近世近代の鹿児島における磁器生産を、平佐焼北郷窯の開窯<sup>9)</sup>を境に、大きく2期（第1期：1598-1778年、第2期：1778-1941年）に分けている（新納1971 pp.13-14）。本稿は、この第2期の前半＝近世をさらに細分したものである。また本稿の二段階は、出口浩二氏が、18世紀後半以降の鹿児島の磁器生産を1期（18世紀後半）と2期（19世紀中頃）に分けているのと同じである（出口2002 p.5）。

ところで橋口亘氏は、16～19世紀の鹿児島県地域における陶磁器の出土様相を検討し、その流通のあり方の時代的变化を「九州島外産陶磁主体→九州島内産陶磁主体→薩摩藩内産陶磁（薩摩焼）の増加」とまとめている。またこのような出土陶磁器の在地産化は、鹿児島において磁器生産が本格化する19世紀前半～中葉頃にピークを迎えるとしている（橋口2002 p.10）。筆者もまた、鹿児

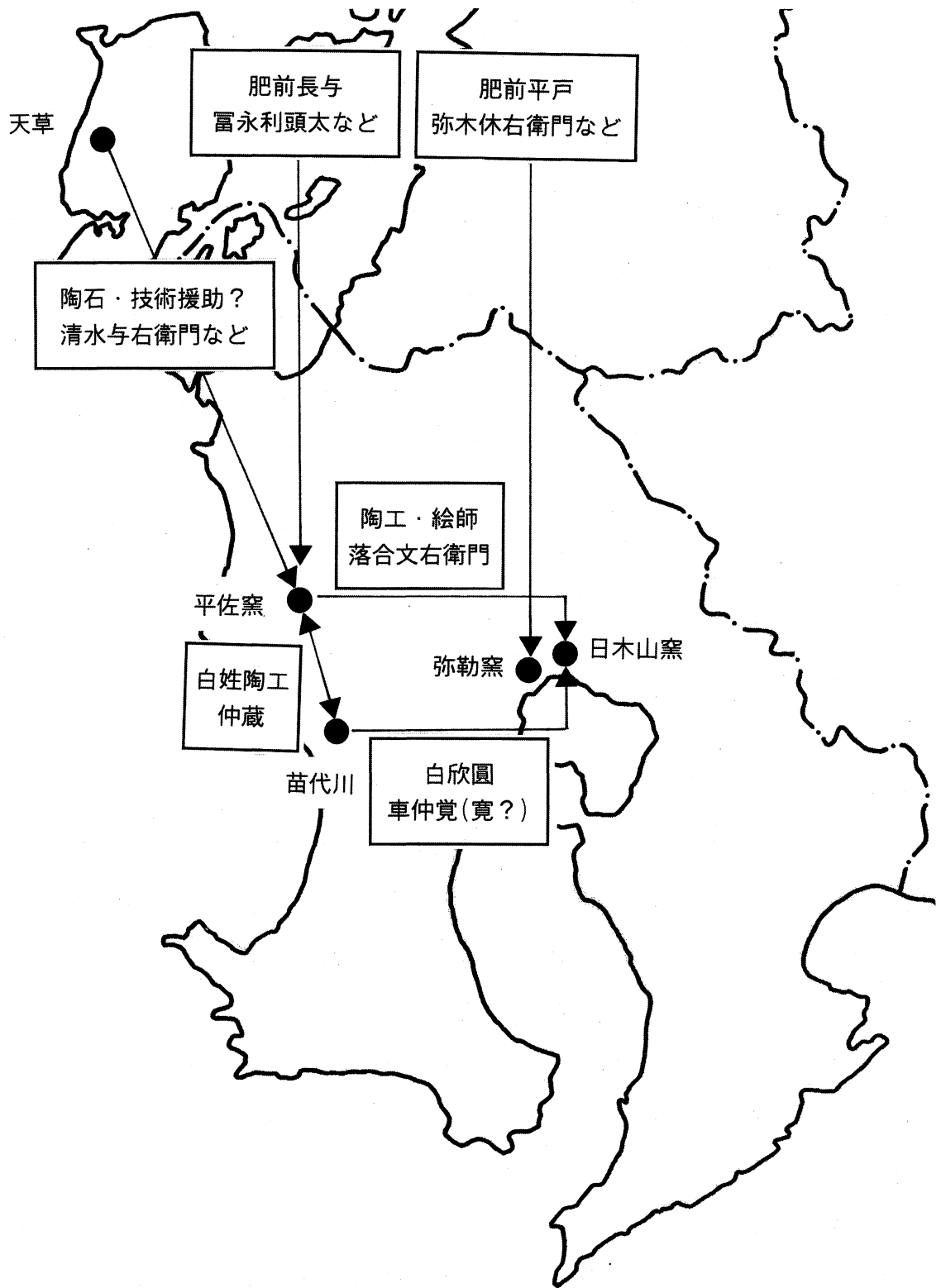


図5 近世鹿児島における磁器窯場間の技術交流

島県内の近世肥前陶磁と在地産陶磁器との関係を検討したことがあるが（渡辺2002a）、この橋口氏の見解を支持する。

このような陶磁器の在地産化は、藩による他藩産陶磁器の流入に対する規制があったとしても<sup>(10)</sup>、それに見合うだけの在地での陶磁器生産の安定・充実が前提となる。磁器の場合、生産の安定・充実のためには、原料となる陶石の安定供給と、磁器製作技術（者）の確保が必要不可欠である。本稿で見てきたように、鹿児島の場合、前者については天草陶石の供給が、後者については、18世紀後半における磁器窯開窯の際の肥前や肥後の陶工の招致が、それらを保証した。

つまり逆説めいた言い方になるが、鹿児島における陶磁器の在地産化、少なくとも磁器の在地産化には、藩外（非在地）からの原料や技術の導入が大きな役割を果たしていたと言えよう。そして技術的に磁器生産が安定してきた19世紀中頃になると、今度は平佐窯を中心とした藩内の磁器窯場間の技術交流が活発化し、原料は引き続き天草に頼らざるを得なくとも、技術的にはより在地化の様相を強めたと推測できよう<sup>(11)</sup>。

## おわりに

以上、近世鹿児島における磁器生産の様相は、技術交流という視点から、二段階に分けられる可能性を指摘した。18世紀後半の第一段階（藩外からの技術導入）と19世紀の第二段階（藩内における技術交流）である。そしてこのような二段階を経ながら、橋口氏が指摘するような陶磁器の在地産化がより顕著になったと考えた。またその背景として天草陶石の九州～西日本における広範な流通があったとした。つまり在地産化においては非在地的要素（藩外からの原料と技術の導入）が重要な役割を果たしたのである。

近年、鹿児島県内における近世窯跡の発掘調査は急速に増加している。磁器窯だけに限っても、阿久根市脇本窯跡（池水1978）、川内市平佐焼新窯跡（前・小原2000）、加治木町弥勒窯（関編2001）、同町日木山窯（2001年調査）、始良町重富皿山窯跡（深野2002）などがすでに発掘調査されている。本稿で述べたよ

うな技術交流に関する仮説を、これら考古学資料で検証していくことが、次の研究のステップとなるであろう。また弥勒窯において龍門司陶工が参画していることに示されるように、在来の陶器生産技術がどのように受容したかも検討する必要がある。

2002年10月30日 稿了

## 謝辞

成稿にあたっては多くの方々からご教示、ご助言をいただきました。文末にご芳名を記して感謝の意を表します。

大武進・大橋康二・鹿児島陶磁器研究会・小島早智子・下鶴弘・新里貴之・鈴木裕子・関一之・出口浩・中村直子・新田栄治・丹羽謙治・橋口亘・橋本達也・深野信之・深港恭子・本田道輝・松村真希子・山下廣幸・山田元樹

(五十音順・敬称略)

## 注

- (1) なお同書によれば、五代星山仲次金致が平佐窯開窯に関わった可能性がある（鹿児島県1940 p.541, 福元2001 pp.148-149参照）。この記述が事実であったかどうかは、今後検討を深める必要があるが、宮之城窯のように、開窯にあたって豎野窯の星山氏を招聘した事例もあるので（渡辺2002c）、藩内における新窯開窯の際には、藩窯である豎野系窯場の陶工がなんらかの役割を果たした可能性もあろう。
- (2) 同「由緒」には、「明治ノ初年ニ至リ欧洲向キノ花瓶等ヲ製シ輸出セシモ多カリシト然ルニ半途崎陽ニ於テ祝融ノ災殃ニ罹リ多数ノ精品ヲ烏有二属セシメシノ不幸アル」とある。また「英國人モンブラン」とは、幕末に薩摩藩と深い関係を持っていたフランス人シャルル・ド・モンブラン伯爵であろう。
- (3) 南京皿山窯開窯前後の事情については、各種苗代川文書をもとに深港恭子氏が詳細に検討している（深港2002）。本稿でも氏の成果を参考にさせていただいた。
- (4) 原本確認の際には、日記を所蔵している加治木町郷土館ならびに丹羽謙治氏（鹿児島大学法文学部）にご高配を賜った。記して感謝申し上げます。
- (5) この点については、渡辺2002bで論じたことがある。論旨の展開上、一部重複している。
- (6) なお本稿では『書上帳』の資料として、その全文が活字化されている同人マジミ版（同人マジミ編1991）を基礎としたが、この活字版にはいくつかの誤記・誤植がある



ようである（渡辺2000a pp.87-88参照）。その点については、原資料を実見された小島早智子氏（元川内市歴史資料館学芸員）のご教示を受けながら、適宜訂正した。小島氏に感謝申し上げます。

- (7) 広島県内の江戸時代後期の磁器窯としては、江波焼・淵崎焼・野呂山焼などがあるが、いずれも19世紀以後の開窯であり、該当しない。寛政7年に加茂郡仁方村（現在の呉市）で磁器焼成が試みられたらしいが、8年には閉窯しているという（村上1981 pp.129-130）。この窯が「広島皿山」なのかどうかは判然としない。また黒崎焼は、現在の大牟田市岬に所在し、天明年間（1781-89）から明治初頭まで、陶器と磁器を焼成し、陶石は天草から運ばれたと考えられている（浅野（鶴久編）1978 pp.6-7, 黒崎公民館編1997 pp.42-43）。なお黒崎焼については、山田元樹氏（大牟田市教育委員会）に資料の提供を受けた。記して感謝申し上げます。
- (8) 『陶器指南』『京都陶磁考』は『陶器全集』第4巻（宝雲舎他編1976）および金田1984に依った。なお京焼における「天草石」については鈴木裕子氏からご教示を受けた。記して感謝申し上げます。
- (9) 新納氏は、平佐焼北郷窯の開窯、つまり平佐焼の創業年代について、天明6年（1786）説を批判し、「北郷家譜」の記述を根拠として、安永7年（1778）としている（新納1971 pp.19-20）。なお「北郷家譜」は『用と美 平佐焼の世界展』図録に一部再録されている（川内市歴史資料館編2000 p.28）。
- (10) 18世紀後半における薩摩藩による他藩産陶磁器の流入規制については、上田家の文書に記述がある（川内市歴史資料館編2000 pp.10-11）。また嘉永5年（1852）にも、肥前焼物の輸入が差し止められているという（深港2002 p.41）。
- (11) 天草陶石の流通が18世紀後半以後の鹿児島における磁器生産の基盤となったことを考えた場合、逆に、17世紀において磁器生産が試みられながら短命あるいは小規模に終わったのは、技術的な理由とともに、原料となる陶石の安定供給が得られなかったことも一因として想定できよう。

## 参考文献

「薩摩陶器傳來ノ畧記」1900年『薩藩旧記』（鹿児島県立図書館蔵）所収

「皿山磁器製造所沿革」1885年『薩陶製蒐録』（鹿児島県立図書館蔵）所収

「磁器製造所由緒」1886年『薩陶製蒐録』（鹿児島県立図書館蔵）所収

「繭糸織物陶漆器共進会 陶器功労者履歴」1885年『薩陶製蒐録』（鹿児島県立図書館蔵）所収

浅野陽吉（鶴久二郎編）1978『増補 筑後陶磁考』鶴久二郎 三瀧（原本は1935年刊行）

池水寛治1978「阿久根市脇本窯址」『紀要出水』pp.8-18 鹿児島県立出水高等学校 出水

鹿児島県1940『鹿児島県史』2巻 鹿児島県 鹿児島

- 鹿児島県維新史料編さん所1982『鹿児島県史料 甕藩名勝考』鹿児島県 鹿児島
- 金田真一1984『欽古堂亀祐著 陶器指南』解説』里文出版 東京
- 黒崎公民館編1997『黒崎物語』黒崎公民館 大牟田
- 小島早智子1999「平佐焼染付寄進文香炉と平佐焼染付寄進文両耳花瓶」『からから』No.3
- 小島早智子2000「平佐焼の展開」『用と美 平佐焼の世界展』図録 pp.38-41
- 下鶴弘編1995『元立院窯跡』始良町埋蔵文化財発掘調査報告書6 始良町教育委員会  
始良
- 前幸男・小原浩2000「平佐新窯－天辰地区埋蔵文化財発掘調査事業（皿山第一地区）概要－」『用と美 平佐焼の世界展』図録 pp.53-59
- 関一之1999「轆轤の軸受け」『からから』No.3
- 関一之2001「阿久根皿山について」『からから』No.9 pp.13-14
- 関一之編1995『山元古窯跡』加治木町埋蔵文化財発掘調査報告書1 加治木町教育委員会  
加治木
- 関一之編2001『弥勒窯跡』加治木町埋蔵文化財発掘調査報告書3 加治木町教育委員会  
加治木
- 川内市歴史資料館2000「平佐皿山の石塔」『からから』No.7 pp.16-20
- 川内市歴史資料館編2000『用と美 平佐焼の世界展』図録 川内市歴史資料館 川内
- 田沢金吾・小山富士夫1941『薩摩焼の研究』座右宝刊行会 東京（1987年 国書刊行会  
復刻 東京）
- 谷川健一他編1979『日本庶民生活史料集成』第10巻 三一書房 東京
- 出口浩二2002「苗代川南京皿山小考」『からから』No.12 pp.5-10
- 同人マジミ編1991「近国焼物大概帳」『あまくさ雑記』創刊号 pp.34-60
- 仲野泰裕1998「日本磁器の展開」『磁器の技と美』展図録 pp.7-12 愛知県陶磁資料館  
瀬戸
- 新納稔明1971「薩摩の磁器」『季刊 用と美』No.1 pp.13-29
- 橋口亘2002「鹿児島県地域における16～19世紀の陶磁器の出土様相－鹿児島県地域の近  
世陶磁器流通－」『鹿児島地域史研究』No.1 pp.3-14
- 平田正範編1993『上田宜珍日記 文化十四年』天草町教育委員会 天草
- 深野信之2002「重富皿山探索記」『からから』No.12 pp.11-14
- 深港恭子2000「薩摩焼をめぐる苗代川関係文書について」『黎明館調査研究報告』第13  
集 pp.101-133
- 深港恭子2002「弘化から嘉永年間の苗代川における焼物生産について」『黎明館調査研  
究報告』第15集 pp.27-41
- 福元忠良2001「平佐焼－平佐と天草・肥前・長与・苗代川をつなぐもの」『千台』第29  
号 pp.146-159

- 宝雲舎他編1976『陶器全集』第4巻 思文閣 京都
- 前田幾千代1934『薩摩焼総鑑』（思文閣復刻1976『陶器全集』第3巻 東京）
- 村上正名1981「備後・安芸のやきもの」『日本やきもの集成9 山陽』平凡社 pp.122-130 東京
- 吉田光邦・横井清1965a「秘められた焼もの職人史5」『日本美術工芸』327 pp.104-107
- 吉田光邦・横井清1965b「秘められた焼もの職人史6」『日本美術工芸』328 pp.122-125
- 渡辺芳郎2000a「近世苗代川人口小考」『鹿児島歴史研究』5号 pp.75-92
- 渡辺芳郎2000b「川内市平佐焼窯跡群について—1999年の分布・測量調査の成果を中心に—」『用と美 平佐焼の世界展』図録 pp.44-52
- 渡辺芳郎2002a「鹿児島県・宮崎県における肥前陶磁」『国内出土の肥前陶磁—西日本の流通を探る』九州近世陶磁学会 pp.679-835 有田
- 渡辺芳郎2002b「『近国焼物山大概書上帳』に見る天草陶石の流通」『からから』12号 pp.15-18
- 渡辺芳郎2002c「薩摩焼窯神石塔2例」『鹿大史学』49号 pp.17-29
- 渡辺芳郎・関一之・下鶴弘2000「鹿児島の製品の編年」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 pp.370-381 有田